

夏休みおすすめ図書 ～中学生向け～

「西の魔女が死んだ」

梨木 香歩//作 小学館 913ナ(児童) B913.6ナ(一般)

学校になじめず、不登校になってしまった「まい」は母方の祖母の家に行くこととなります。そこで、“何でも自分で決める”という魔女修行をすることになり、修行や祖母との生活を通じてまいが成長していく話です。2008年に映画化されています。

「ディズニーそうじの神様が教えてくれたこと」

「ディズニーサービスの神様が教えてくれたこと」

鎌田 洋//著 ソフトバンククリエイティブ 689カ(一般)

東京ディズニーリゾート(ディズニーランド・ディズニーシー)を運営するオリエンタルランド社に入社し、夜間の清掃部門を振り出しに、その後全スタッフを教育・育成する教育部門である教育部長代理を経て独立した著者が、ディズニーランドで体験した様々なエピソードを「物語」として描いています。

「リリース」

草野 たき//著 ポプラ社 913ク

外科医の父をもつ明良。「後を継いで医者になれ」という父の遺言で明良の将来は勝手に決められるとともに、家族からは期待されたため、プロバスケット選手になることを夢見る気持ちを隠して生きてきます。ところが、兄の裏切りや祖母の発言によって明良は……。

「よるの美容院」

市川 朔久子//著 講談社 913イ

月曜日の夜、美容院の暗い店内に、あまいシャンプーの香りが立ちのぼる。シャンプーのやわらかな指先に、心を閉ざしていたまゆ子の心が、ふっくらとやさしくほどかれていく……。

「きよしこ」

重松 清//著 新潮社 913.6シ

吃音症（きつおんしょう。発音がうまくできない症状のこと。）に悩み苦しむきよし少年が、自分と向き合いながら成長していく話を、小学一年生から高校三年生まで七つの短編によって描いた作品。

「大草原のちいさなおオカミ」

姜 戎//作 唐 亜明//訳 講談社 923ジ

草原の長老から話を聞き、すっかりオオカミの虜になった中国人の学生チェンジェンは、オオカミの子を飼おうとするが…。

「ちいさなちいさな王様」

アクセル・ハッケ//作 ミヒャエル・ゾーヴァ//絵

那須田 淳・木本 栄//共訳 講談社 943ハ

ある日、僕の部屋に現われた、人差し指ぐらいの大きさしかない小さな王様。彼が言うには、子ども時代に一生が終わってしまうらしい。僕らのところとはちがって…。

「メジルシ」

草野 たき//著 講談社 913ク

両親の離婚と、全寮制高校への進学のため、家族がバラバラになる主人公の双葉。父親の提案で、北海道へ家族最後の旅に出ます。3泊4日旅の中で、双葉はあらためて家族と自分を見つめ直します。

「オレたちの明日に向かって Life is Beautiful」

八束 澄子//著 ポプラ社 913ヤ

中2の職場体験で、保険代理店を希望した花岡。保険代理店の経営者は家族でお世話になっている今井さんである。保険事故の対応で様々な人にも誠実に仕事をこなす今井さんを、花岡は尊敬しはじめます。その中で、花岡の中にも少しづつ何かが変わり始めていきます。

「ぼくはここにいる」

さな ともこ//作 かみや しん//絵 講談社 913サ

ツライ学校生活に息の仕方も忘れてしまったボクは、屋上から飛び降りようとした。

でも、その時どこからか「お命、預からせてもらいます」と声がして・・・。

関西弁を話す目に見えないおかしな星と、人生に絶望したボクの不思議な散歩。星と散歩する？

毎日が辛くて苦しい、未来を見失ってしまいそうな人へ贈るお話です。

「ソルハ」

帚木 逢生//著 あかね書房 913ハ

1996年9月27日、アフガン政権が崩壊し、タリバンが首都カブールを制圧。生まれたときから戦争が日常の風景だった少女ビビ。タリバンの厳しい監視下のもと、自由を奪われ、好きな勉強もままならぬ状況に置かれながらも、「すべてはアッラーのおぼしめし」と受け入れ、悲しみに耐える少女ビビの純真さに心打たれます。国や民族、宗教の違いを超えてソルハ（平和）の意義を問う、戦禍を生き抜く少女ビビの物語です。

この本の中で紹介されている一万時間の法則を、確かめてみてはいかがでしょうか。

「ピアノ調律師」

M・B・ゴフスタイン作・絵 すえもりブックス 933ゴ

ピアノ調律師のデビー・ワインストックは小さな孫娘をひきとることになった。彼は彼女にピアニストになってほしかったが、彼女は、ピアノ調律師になりたいと思っていた。やがて、町で行われるコンサートに有名なピアニスト、アイザック・リップマンがやってくることになった。ピアニストは、ワインストックの調律師としての腕に全面的信頼を持っていた。対面のと、コンサート用のピアノを調律している間、孫のデビーは、今日予定していたパールマン婦人の家のピアノを自分で調律しようとしてしまう…。☆自分のなりたい職業を考えさせられる一冊。

「いじめのある世界に生きる君たちへ」

・ ・ いじめられっ子だった精神科医の贈る言葉 ・ ・

中井 久夫//作 中央公論新社 371ナ

著者は日本を代表する精神科医であり、自身もいじめられっ子だった体験を持つ。

この本は、著者の論文「いじめの政治学」を子ども向けに編集したもので、いじめが進んでいく段階を「孤立化」「無力化」「透明化」の3段階で解説し、いじめられている子の安全の確保について論じている。編集者のあとがきには、「特にいじめられている子どもたちに読まれることを願って企画された」とあるが、いじめても、いじめられてもいない（と思っている）人にこそ読んで欲しい本。

「天才のら犬、教授といっしょに哲学する。人間ってなに？」

（10代の哲学さんぽ 1）

セシル・ロブラン/ジャン・ロブラン//作 岩崎書店 114ロブ

「人間ってなに？」 フラッと通りかかった言葉を話せる変な犬から、とつぜん議論をふっかけられた哲学教授。そこから始まる、意外と中身の濃い議論……。人間ってなんなんだ？ とことん考えてみませんか？ 哲学してみませんか？

「自由ってなに？ 人間はみんな自由って、ほんとう？」

（10代の哲学さんぽ 2）

アニッサ・カステル//作 岩崎書店 104カス

あなたは自由ですか？ きゅうくつだな、自由になりたいなと思ったことはありませんか？人間はみんな自由だって言うけど、ホントにそう？ そもそも「自由」ってなに？「自由」についてとことん哲学しましょう。

当図書館には、この「10代の哲学さんぽシリーズ」を1から5までそろえています。

この夏休みに、ぜひ全部読んでみてください。

「きみ江さん」・ ・ ハンセン病を生きて ・ ・

片野田 斉//作 偕成社 児童 289ヤマ

きみ江さんは昭和8年生まれ。21歳の時にハンセン病と診断され、多摩全生園という隔離施設で人生のほとんどを過ごします。

ハンセン病患者が受けた「偏見」と「差別」、そして「いじめ」。元ハンセン病患者のきみ江さんの生い立ちから現在までを、報道カメラマンである著者が、その姿を追ったノンフィクションです。

「私のスポットライト」

林 真理子//作 ポプラ社 913ハ

彩希は中学2年生。顔も性格も地味でフツウ。美人で目立つ、同じ歳のいとこの美冬とは、なにかと比較されてばかり。そんな彩希が、学園祭のクラス劇で押し付けられて主役を演じ、演劇の面白さを知ります。児童劇団に入団した彩希は、「カンチガイしてる」と陰口をたたかれます。悩みながらも自分のやりたいことを見つけ、変わっていく彩希……。

「13歳からの日本外交 それって、関係あるの!？」

孫崎 亨//著 かもがわ出版 319マY

この本を手にとられた方にお願ひがあります。まず、最終頁の奥付に目を通してください。そして、著者の略歴を頭に刻み込んでください。そうです。この本の内容は、決して著者個人の憶測で著したものではなく、事実に基づいて著したものです。したがって、今まで一般の国民の知り得なかった、いや、知らされていなかった情報や事実が至る所にちりばめられています。

将棋の藤井聡太7段は、15歳の時「今関心があること」について「原発と尖閣問題」と答え、つい最近では「米朝会談」と答えています。日本の今が、先人の外交努力によって築かれ成り立っていることや、これからどう諸外国と対峙していくべきか。今こそ過去の英知を次の世代に引き継ぐべき時、引き継がれるべき時なのです。この本を手にとられた皆さんの道標になる一冊としてお勧めします。

「氷の海のカレオン」

木地 雅映子//著 講談社 913.6キ(一般)

『自らを天才だと信じて疑わないひとりのむすめがありました。斉木杉子。十一歳。一わたしのことです。』

学校が性に合わなくて、教室は息苦しくて、クラスメイトとは話が合わなくて、自分がまちがっているつもりはないけれど、周りとは圧倒的に噛み合わないから、正しいのかどうか自信もない。みんなから変わりもの扱いされるし、自分でも否定はしないけれど、それって馬鹿にされるほどおかしいことだろうか。自分ではどうしようもないことなのに。

救いは、家族もみんな変わりものだということ。パパもママも、お兄ちゃんも弟も。現実が何も変わらないのなら、せめて声高に叫ぼう!『天才はつらいのだあ!!』

杉子と同じように、堅苦しさを感じているすべての「変わりもの」のみなさんへ。知る人ぞ知る、伝説的な一冊です。

「グレーテルの白い小鳥」

斉藤 洋//作 森泉 岳土//絵 偕成社 913サ

児童読書相談コーナーの席に座っているぼくは、図書館の非常勤職員。この席に座っていると、ときどき不思議な体験をする。児童書の相談をするついでに、不思議な話をしていく人がけっこういるのだ。

その例をいくつか紹介しようと思う。まず最初は…。

「解剖学教室へようこそ」

養老 孟司//作 筑摩書房 491ヨ

この本は、作者の専門分野である解剖学についてはもちろん、細胞レベルからとらえたヒトの身体の構造、心と身体の関係などについても、独特のシニカルなタッチで語られている。

解剖なんて、気味が悪くておそろしい？いやいや、そんなことはない。最初は恐々読み進めても、わかりやすい説明を読むと、だんだん、身体の論理性がわかってくる。ひとつひとつ結び目を解くみたいに。学問への入り口として、純粋な疑問への出発点として、スタートするのにとてもよい本だと思います。

「琉球という国があった」

上里 隆史//文 富山 義則//写真 一ノ関 圭//絵 福音館書店 219ウ

『琉球国』が『沖縄県』となるまで。その歴史には、アジアの国々が深く関係していました。今も独特な文化が残る沖縄県。“〇〇とは”を納得し、“なぜ”が繋がったとき、『琉球』の背景が見えてきます。幸運とかしこさをもったこの国を、あなたはどのように思いますか？

「カラフル」

森 絵都//作 理論社 913モ

死んだはずのぼくの魂が、神さまの気まぐれで、小林真という少年の体を借り、再び生きるチャンスを与えられる。

思春期、反抗期、生き辛さを感じている中学生の不安定な心の中が描かれています。

友だちの大切さ、家族のあたたかさを知り、ぼくは変わり始めます。人間はいつだってやり直せる。生きる勇気をもらえる一冊です。

「ひかり生まれるところ」

まはら 三桃//著 小学館 913マ

心にずっと閉じ込めていた中学生時代。大人になって神職として神社で働く希美。中学生時代と大人を行き来しながら進んでいく物語。

誰もが抱えている心の傷。時間の経過と共に人として成長していく物語。

「きみの存在を意識する」

梨屋 アリエ//作 ポプラ社 913ナ

同じ学校に通う中学2年生の生徒たち。彼らはそれぞれ、他人には理解し難い悩みを抱えていた。本を読むことが苦手な石崎ひすい、字を書くことに違和感を覚える心桜、自分は「自分」であってなにものにも分けられたくない理幹、みんなと教室で授業を受けられない留美名。

各章ごとに語り手が変わり、それぞれの目線から描かれる連作の短編集です。

「壁抜け男」

マルセル・エーメ//作 平岡 敦//訳 ヨシタケ シンスケ//絵
理論社 953エ

作者の幼少期の辛い体験や、苦勞を重ねた人生経験の影響が、エーメ作品には色濃く現れています。社会の片隅でひっそりと生きる人々に向けられる共感、そして作者ならではの皮肉っぽい視線がどの作品にも感じられます。

『壁抜け男』は、平凡な暮らしを送る中年男がある日、壁を通り抜けることができるようになり、スリルを味わい、恋を知り、そして自ら身の破滅へ。なんとも残念な中年男のお話です。

「マタタビ町は猫びより」

田丸雅智 // 作 辰巳出版 913.6 タマ (一般書)

猫は、せまいところを見つけては入り込みます。「いいところみっけ、落ち着くにゃあ。」とか。

とにかく猫にとっては、せまいところが好きです。小さめのダンボール箱や袋などは特に大好きです。

特にマタタビ町の猫たちは、住人の心の隙間にも入り込んで癒してくれて、まるで臨床心理士です。

ところで余談ですが、町には猫店長がいますが、猫駅長はいません。なぜかと言えば商店街はありますが、駅はないからです。

「どんぐり喰い」

エルス・ペルフロム // 作 野坂 悦子 // 訳 福音館書店 949 ペ

スペインの内戦終結後 アンダルシアの貧しい村に生まれた少年クロ。特権階級の地主の森からは、炉にくべるたきぎさえ拾うのも抑圧される生活の中で、クロは学校をやめて、家計を助けるために働きにます。寒い冬には足を紫色にして、前向きに働く少年の姿に力強さが描かれています 1990 年、オランダで最も優れた児童文学に贈られる「金の石筆賞」受賞作。

★今の私たちには想像できない貧しい生活の描写に驚きますが、これは、作者の夫の子ども時代の経験をもとに書かれた物語と知ってさらに驚きました。ちょっと長くてページ数の多い本なのですが、中学生におススメの一冊です。夏休みに挑戦してみませんか？

「スウィートホーム わたしのおうち」

花里 真希 // 著 片山 若子 // 装画 講談社 913 ハ

クラスでも部活でも、誰に対してもキツイ言い方をしてしまう中学1年生の千紗。家では、部屋を片付けられない母と、いつも厳しく千紗の言うことを全く聞いてくれない父に、毎日いら立っている。どうしていつも、思い通りにならないのだろう。

そんな不満ばかりの千紗の毎日が、あることをきっかけに一変する。毎日、少しだけ、自分の部屋の片づけを始めたのだ。部屋がきれいになると、心もすっきりしたように感じて…。

「二番目の悪者」

林 木林 // 作 庄野 ナホコ // 絵 小さい書房 726 シヨ (一般書)

金色のたてがみを持つ金色のライオンは、王さまになりたかった。だが、街はずれに住む 強くて心のやさしい銀のライオンが次の王さまにぴったりだという噂話を聞き、金のライオンは、銀のライオンのありもしない悪い噂を広めて歩き…。

「考えない・行動しない」という罪。SNSが主流の今、ぜひ読んで欲しい一冊です。

「ルーミーとオリーブの特別な 10 か月」

ジョン・パワー // 著 杉田 七重 // 訳 小学館 933バ

12歳の女の子、オリーブは幼い頃に母を亡くし、配管工である父と二人で暮らしてきたが、その父も病で失った。ほとんど会ったことのない異母姉妹の姉モーディに連れられて、シェアハウスでの新生活が始まる。知らない町。知らない人々。何もかもが不安なオリーブの前に現れたのは、一匹の子犬。盲導犬候補のルーミーだった。パピーウォーカーとしてルーミーと接し、周囲の人々と暮らしていくうちに、オリーブは幸せに暮らすことについて考え、行動していくようになる。

ルーミーとオリーブの成長の物語の中には、生きていく上で笑顔になるためのヒントがちりばめられています。楽しいことや幸せなことばかりじゃなくて、つらいことや嫌なこともあるけれど、乗り越えた先にはきっと大切な何かを見つけられる。一歩前へ進む勇気をくれる、そんな作品です。